

変化する学術情報の流通と中東研究文献——欧米文献を中心に

泉沢久美子

●アラブ研究文献と文献目録

アラブ研究が俄かに脚光を浴びたのは、やはり一九七三年一〇月の第四次中東戦争に端を発したオイルショック以降であろう。やや乱暴な例ではあるが、「アラブ」というキーワードを持つ文献について一九七〇年代以降の刊行点数を見てみよう。図書については、世界最大の図書館である米国会図書館の所蔵目録データベース（USMARC）、また雑誌論文については社会科学系の論文索引データベース Worldwide Political Sciences Abstracts と Ecomlit での検索結果から図1のような傾向がみられる。一九七〇年代と比べて一九八〇年代には図書は二倍以上、雑誌論文は五倍以上に急増したが、一九九〇年代には図書は減少に転じ、雑誌論文数が図書を超えている。近年、学術研究の発表の場が理工医薬系のみならず、社会・人文系においても図書から雑誌に転じているといわれるが、アラブ研究にもはつきりと現れている。そして、一旦減少傾向にあったアラブ研究であるが、二〇〇一年の九・一一同時多発テロやイラク戦

争等の影響から再び増加傾向にある。

一方、文献目録をみると、一九七〇年代後半以降、アラブ研究の急増に呼応するように出版が倍増している（図2参照）。当時、文献目録は、研究者にとって先行研究や類似研究の調査のための欠くべからざる研究ツールであり、ライブラリアンにとっては、研究資源の提供と共有化を図るための積極的な書誌活動であった。たとえば、*The Contemporary Middle East 1948-1973. A Selective and Annotated Bibliography* (GN. Atyeh 編, GK Hall, 1975) は、約六五〇〇件の図書・雑誌論文について丁寧な主題・地域別に分け、全てに解題を付している。文献目録の刊行が活発化した別の要因は、情報技術の発展にある。それまでの編纂作業は図書館の目録カード等を頼りに手作業で行われていたが、一九八〇年代から図書館や出版社において目録情報のコンピュータ化が一般化し、書誌データベースとして蓄積されるようになる。これ以降、文献目録の編纂に使われたデータは、書誌データベースに蓄積されたり、逆に既存の書誌データベースが文献目録作りに活用されるよ

うになった。たとえば、クリオ出版社の“World Bibliographical Series”はその例で、中東二カ国を含む各国別の文献目録が多数出版された。他に、中東の国際政治に関する論文約三〇〇〇点の文献解題 *The Middle East in Conflict: A Historical Bibliography* (GA. Schlachter & PR. Byrne 編, 1985) がある。しかし、アラブ研究が再び活発化した二〇〇〇年代だが、文献目録の刊行は減少したままである。

●インデックス・イスラミカス——冊子体とデータベース化

欧米語で発表された中東・イスラム研究をカバーする最も定評のある文献目録は、*Index Islamicus* である。これは、ロンドン大学東洋アフリカ研究所 (SOAS) のライブラリアンで書誌学者でもあった JD Pearson 教授の手による *Index Islamicus* us.1906-1955 (Cambridge, 1958) を起源とする。その後、五年毎に補遺版が刊行され、一九七七年には *Quarterly Index Islamicus* となり、一九九〇年代からは年刊版の刊行と書評論文を加えるなど拡充が図られてい

図2 アラブ関係文献目録

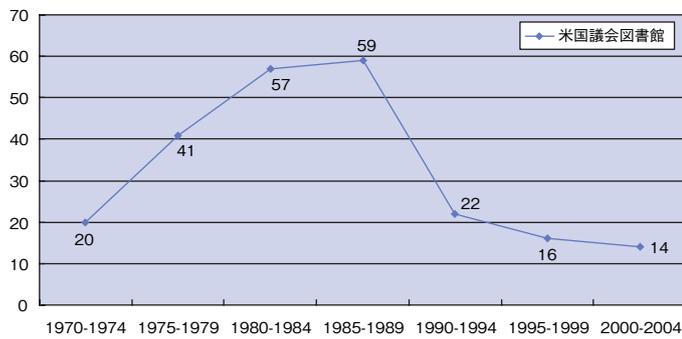
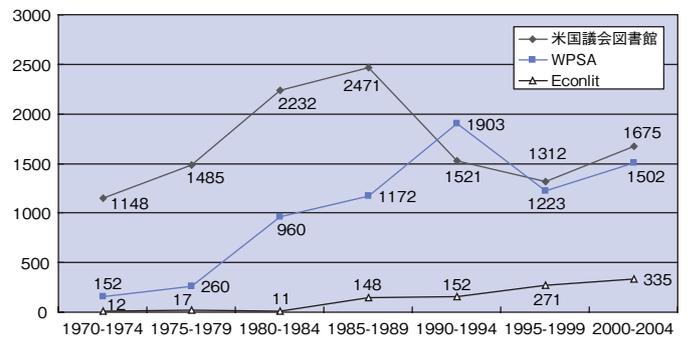


図1 アラブ関係文献の発行点数の推移



のデータベースを活用した有益な研究ツールも刊行されている。まず、*The Concise Biographical Companion to Index Islamicus* (W. Bahr 著、Leiden, Brill, 2004) は、*Index Islamicus* に収録した執筆者について業績文献、略歴をまとめたイスラム研究者の人名録である。また、文献目録では、 *Iraq: A Bibliography Guide* (C. H. Beane and G. J. Roper 著、Leiden: Brill, 2004) と *Afghanistan: A bibliography* (H. Bleaney and M. A. Gellego 著、Leiden: Brill, 2006) がある。前者

は約六五〇〇点、後者は約五〇〇〇点を収録する。いずれも地域の歴史・政治等の特性に合わせた確に主題分類された包括的な文献目録である。書誌データベースは、必要文献をピンポイントで探すだけのツールとして利用されがちだが、冊子目録は、主題別に配列された書誌情報の中から関心分野のみならず、新たな研究テーマの発見や同時代の研究動向を読み取るツールともなり得る。読み物として活用してほしい。

● 学術情報の多様化

一九九〇年代後半以降、急速なIT化によって学術情報の流通・提供方法が劇的に変化し、利用者のニーズも多様化している。

すなわち、ウェブで提供する電子ジャーナルやデータベースの出現によって、利用者は図書館に向かず論文や新聞記事、統計データにアクセスできるようになった。一方、図書館の機能は、こうした電子媒体の確保と膨大なコンテンツを提供するための窓口となるポータル構築に躍起となり「所蔵からアクセス」に変化しているように見える。

たとえば、中東・イスラム関係のポータルでは、コロンビア大学、ハーバード大学、テキサス大学の各中東研究センターの図書館が充実している。また、興味深いのは、ドイツの MENALIB: Middle East Virtual Library である。このポータルは、一部有料なのとレスポンスがやや悪いのが残念だが、

中東研究関係機関等の所蔵図書・論文、会議資料等の各種データベースを横断検索できるのが便利だ。また、特定のトピックや主題について情報の入口を提供する「パスファインダー」が充実している。これは、利用者にまさに冊子目録の目次から関心主題にアクセスさせるようなツールで、ライブラリアンが文献に付加した分類や主題件名によって誘導される。各書誌情報の内容は、主題件名や関連ウェブサイトへのリンクの他に、目次、明瞭さ、索引、リンクについて三段階の評価指数を示すと共に文献の利用対象層を明らかにしている。

さて、Google社やマイクロソフト社と出版社や図書館、学術団体が提供する学術情報の連携が図られ、Google Scholar や Windows Live Academic Search などの学術情報専門の検索エンジン、あるいは Google Book Search といった大規模電子化プロジェクトが目ざされている。しかし、人文・社会科学系の学術情報は依然として印刷物に依存しているのが現実である。研究者は当面、ストレスを感じながら、さまざまな媒体の研究情報を駆使せざるを得ないだろう。恐らく今後、利用者が図書館に求めるものは、利便性や迅速性に富んだウェブ上の情報や検索エンジンによる掲載順位ではなく、高い信頼と正確な情報集積、あるいは研究リソースの探索方法かもしれない。

(いずみさわ くみこ/アジア経済研究所 図書館)